

雨にも負けて

1日だけの名優たち

風にも負けて

西村 滋 著



雨にも負けて

1日だけの名優たち

風にも負けて

西村 滋 著



民衆社

B29847

著者紹介

西村 滋 (にしむら・しげる)

名古屋生まれ。十歳の時、孤児になり放浪生活が始まる。戦後、戦争孤児施設「有隣療護院」の補導員となり、そのことを原点とした作品を発表し続ける。

主な著書として、

『陽のあたため恋人たち』(春陽堂)

『笑わない青春の記』(中央公論社)

『雨にも負けて、風にも負けて』

(民衆社)

75日本ノンフィクション賞受賞

『お菓子放浪記』(理論社)

『しゃくなげの詩』(エルム)

『妻よ男のみる夢は』(創世記)

『原爆はおちなかった』(創世記)

住所 静岡県沼津市下香貫宮脇274

雨にも負けて 風にも負けて

一九八一年四月二〇日 第一版第一刷発行
一九八一年七月二〇日 第一版第二刷発行

定価 一、二〇〇円

著者 西村 滋 ©

発行者 沢田 明治

発行所 株 民衆社

東京都千代田区飯田橋二一―二

カサイビル内(〒102)

電話 03-265-1077 (代表)

振替口座番号 東京4-19920

印刷所 大文堂印刷株式会社

製本所 東京美術紙工業協同組合

★乱丁・落丁本についてはお取りかえいたします

書籍コード 0037-002073-8058

©1981. Minshusha, Tokyo

故・石井敬一郎師と薫夫人及び有隣劇団の名優たちに捧ぐ

目次

一章 劇団誕生

5

舟山次郎／関　モモコ／諸口純一／思わぬ発見／
石井院長夫妻／はじめての公演



二章 ウソのない劇を

33

小田文雄／三浦雅人／瀬尾　明／安部信二／高倉スミ子／
篠原八重／久保フサノ／きらわれた文芸劇／「鐘の鳴る丘」は
ウソだ!!／「故郷の声」の本格的上演／占領軍の圧力

三章 慰問劇団奮戦す

67

谷　陽吉／徳丸光男／土屋ヒロコ／伊勢建夫／矢代伸夫／
畑野　元／福本正志／海老フライとヒューマニズム／
「秋まつり」の初演騒動／花嫁修行(井上峰子)／慰問公演の
哀歓

四章 晴れがましい日のために

111

鶴見格一／黒須安彦／橋爪 登／曾我逸郎／富岡節子／
夢のような話／体当たりの演技を／役もめ／稽古日誌より

五章 ひのき舞台

169

霊安室の稽古／呼び込み／戦いの始まり／ハプニング／
どうにもこうにも大成功／院長の死／別れ／流れ

六章 名優たちよ、いまいずこ

207

おとなの生き様……／小田文雄の場合／芹沢康治の場合／
谷 陽吉の場合／橋爪 登の場合／瀬尾 明の場合／
土屋ヒロコの場合／井上峰子の場合／福本正志の場合／
諸口純一の場合／倉本 栄の場合／久保フサノの場合／
舟山次郎の場合／富岡節子の場合

あとがき

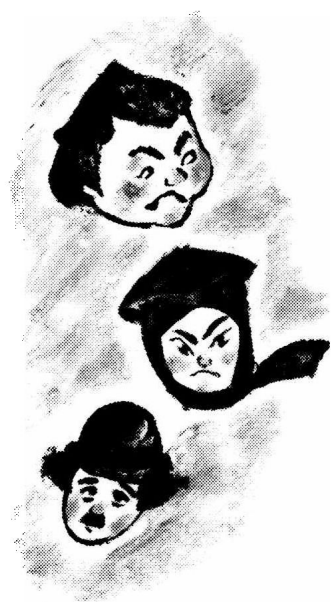
267



装幀 天造 直子

さし絵 朝倉美恵子

一 章 劇団誕生



定八(国定忠治の子分)

◇舟山次郎(13歳)

赤城山場で、彼は大きく目をむいて、いった。

「親分、雁が鳴いて南の空へ飛んでゆかッ」

有名な台詞である。だが、この少年は、それよりもはるかな名台詞を持っていた。

「戦争孤児はマジメになんかなれないよ」
というのである。

次郎は多くの仲間と同じように、空襲で肉親を失っていた。そして、多くの仲間と同じように、浮浪児として上野駅の地下道にいた。闇市で一個の大福をかつばらって、鼻のひん曲がるほど殴られたこともある。猫の目のような目で、人を見上げるクセがあるので、あまり好かれるタイプではなかった。顔だちも、眉が異常につりあがっていて、可憐とはいえなかった。

施設へ送られてきた時、消毒のため裸にすると、体のいたるところに無数の痣があつた。盗みのたびに罰せられた痣なのだ。罰したのは街のおとなでもある。次郎の皮膚には、敗戦で荒廃した人々の心が刻みつけられていたわけだが、痣は次郎の内部にもひろがっていたようだ

った。

私たち施設の補導員は、定員の二倍三倍という戦争孤児のむれに囲まれて、補導どころではなく、ただその日常につき合うだけで精一杯だったが、たまには説論じみたこともいわねばならなかった。

ほんとは説論するガラでもないのである。こっちもまだ二十歳そこそこで、敗戦という大きな歴史の断層の中で自分を見失っていたのだが、それでも補導員である以上、舟山次郎のような極端に反抗的な者を、ほうってはおけない。そして、説論するとすれば「マジメになって……」などと、当時の世相にあつては死語にひとしい文句も使うことになる。

これに対する次郎の応酬。

「マジメになんかなるものか。だって、戦争孤児がリッパな人間になったりしたら、戦争の好きな奴らは喜んじゃうよ、いくらひどい目にあわせても、負けないでガンバるから大丈夫だ。だからまた戦争をやるうじゃねえかって……」

私はひっぱたかれた思いがした。十三という年齢に安心してはいけないものである。

寒さ、ひもじさ、さみしさ、ということとは、もしかしたら二義的なことだったのかもしれない。それらが積み重なったところで煮つめられた思考が、おそろしいのだった。

無意識なのだろうが、次郎は「不屈の魂」とか「更生」といった勇ましい言葉を否定していたわけである。

私の相棒だった奥居補導員は、宮沢賢治の「雨ニモマケズ」の詩が好きで、それを自分の部

屋の壁に飾っていたが、次郎の言葉を聞かされた日、やぶり捨ててしまった。

「雨ニモマケズ、風ニモマケズ……しかし、それは嘘なんだな。人間は時には本気で負けななきゃいけないんだな。本気で負けることもできず、いいかげんところで立ち直っちゃうから、雨も風もいい気になってのさばるといふわけなんだな……」

その哲学(?)に殉じたのかどうか、次郎はその後、わざわざ人生の暗い部分を選ぶようにして歩いてゆく。

里の娘(その1)

◇関 モモコ(14歳)

放火癖のある少女だった。といっても未遂ばかりだが、施設へきてからも何度かこころみて、私たちの肝をひやした。狂気の沙汰だが、それなりの理由はあった。

……モモコの家は渋谷の道玄坂裏にあり、母親は軍工場の重役の二号で、戦争下にもくらしに困ることはなかったが、空襲が苛烈になってくると、男手のないことを心細がった。色街なので、木造家屋が狭い露地をはさんで密集しており、大空襲があればひとたまりもなかった。

三月十日(一九四五年)には、例の下町を中心とする大空襲があり、母親は縁者の安否をたずねるため、モモコを連れて焼跡へ出かけていって、その惨状を見ていた。ガソリンをかけられて焼却される死体の山も、隅田川に漂流する死体のむれも。

今度は山の手方面がやられるという情報が巷間にささやかれていた。敵機が散布した予告の

ビラを、ひそかに隠し持っている者もあった。

母親は恐怖のあまり半病人の状態になった。夜中にむっくり起きあがって、

「ああ、いまに空襲のサイレンがなる。今夜こそ焼けてしまう。このふとも、このダンスも、この戸棚も、みんな燃えてしまう」

風呂呂に入っていて、突然号泣することもあった。

「ああ、こんなにして体を洗ったってムダなことだ。どうせ今夜にも焼き殺されてしまうのに……」

また、ドカンドカンとはじまっている最中に、戸外へ飛び出し、上空の敵機を拜んだこともあるという。

「私たちの家は焼かないで！ 私たちはアメリカを憎んじやいない。鬼畜米英だなんて思っちゃいない。見てくださいよ。私たちはなんの武器も持っていないんです。おねがひだから助けて！」

そんな母親を、隣人たちは臆病者と笑い、非国民とさげすんだ。モモコは、恥じも外聞もないその怖がり方をあさましいと思いがら、それでも、一億総決起などと勇ましく喚おどいている連中よりは、ホンモノの人間のような気がした。そして、自分もいつのまにか母親と一緒になつて恐怖するようになった。

……空襲のサイレン。さア、とうとう今夜はダメだと思う。母と娘は、これが最後だと水盃をして、死の覚悟をさだめる。だが、何事もなく終ってしまったたり、爆撃されたのは別の土地

だったりする。

モモコは、何事もなく終ってしまうことの恐怖を知った。それは終ったのではなく、まだ終らないことだったから。

ある夜、上空に爆音を聞きながら、モモコはいきなり電気をつけた。東京中がまっくらな中に電気をつけるなど、敵機に合図をおくるようなものである。むろん、あぶなく町内から追放されそうになった。

家に放火しようとして、隣人に見咎められたこともあった。モモコは早くすませて安心したかったのである。

……五月二十五日の大空襲でその希望(?)は達せられた。その夜、母親は爆死し、恐怖から解放された。

やがて戦争は終結する。空襲の恐怖はなくなったはずである。にもかかわらず、モモコの放火癖だけは尾をひくのである。

それについて、モモコはいった。

「浮浪児の時は宿なしだから、空襲のことは忘れてたんだけど、施設にきたら、また怖くなったの。自分のベッドがあるでしょ。自分のふとんがあるでしょ? 屋根も天井も壁もあるんだもの。浮浪児だったことから考えると天国みたいでうれしいんだけど……なんだか心細いの。ベッドもふとんも、またいっぺんに消えちゃうような気がするの、あの晩のように燃えてしまいうような……怖くて心配で、たまらなくなつて、それで、いっそ自分で燃やしちやおうって気

になるの」

板割の浅太郎

◇諸口純一（14歳）

街にいた時は、万引き少年だった。本が専門だったという。ボスがいて、徹底的な訓練を受けたというのだが、聞いてみると、なかなか大変なものだった。

……万引きは手先の器用不器用より、まずハラが肝心だと教えられた。このおヒン（品物）を、自分が盗むのだと思うな。盗むのだと思えば、自然に眼光は鋭くなるし、体勢も盗み腰になる。盗み腰というのは、盗む前からすでに逃げ出す用意で踵（かかと）が浮いてしまうことだ。手先と心が分裂して、手先は獲物に近づいても、心のほうは表へ飛び出している。それではいけない。

このおヒンは自分の物だと思え。

金を支払って買った物だと思え。無理にもそう思いこむのだ。まず自分がそう信じるのだ。敵に怪しまれないためには、まず自分が万引きであることを忘れなければダメだ。

ボスは、高値を呼びつつある書籍のリストを配布し、これを目とアタマに刻みこんでおけといった。難解な書名ばかりであった。純一は、それらの字画を、一種の図柄のように脳裡に記憶した。

仕事用にと、学生服を与えられた。そして、自分でも真正正銘の学生だと思えといわれた。

万引きの精神学みたいなものである。

別に小道具として本の空ケース。これを五、六個、風呂敷包みにして店へ入る。どの店でも、台に置いてあるのは雑誌類で、高価な本は書棚におさめてある。棚から一冊ぬき取れば、一冊分の空間ができる。それを持参の空ケースで埋めるのである。

上衣の下にしのばせたり、ズボンのベルトに突きさすのはシロウトの仕事である。それではせいぜい一、二冊しか盗めないし、スタイルが不自然になって危険だ。

混雑している店を狙うのもシロウト考えで、たて混んでいれば警戒の目も鋭い。といって、朝のガラ空きや、食事時で店員が手薄になっている場合も、あぶない。かならず手薄を補うだけの神経がはたらいているからである。

最適の状況は、この規模の店なら、客はどのくらい、店員が何人、書架の配置がこうなっていると、レジからの死角はこの位置になる……ボスの説明は図解入りだった。

……店に入ると、まず、小銭を投じて一冊を買う。いちばん安い雑誌を買う。安物にしる、買ったお客には店の警戒がゆるむ。

「○○の今月号、ありますか？」

と聞いてみるのもよろしい。ポケットから金を出そうとするしぐさをすれば、なおさら芸がこまかくなる。○○は月刊本だが、むろん、発行日をおぼえておいて、それ以前の日に行くのである。

「あれはまだ、入荷しておりません」

「ガツカリだな。確か今日発売だと思ってたけど……」

そんなやりとりでも、かなり敵を油断させられる。

サテ、仕事にかかる。書棚の本を物色する思い入れで、抜いたり戻したりしながら、例のリストで見憶えのある背文字を発見すると、すばやく、その本と空ケースとを交換する。どれほど不安でも、周囲に目をくぼってはならない。手先よりハラが肝心とはこのこと。あわてず、自信をもって、ごく自然に、口笛を吹くぐらいの余裕をもって、しなければならぬ。空ケースは埋くさとして書棚に残り、それと同じ嵩かさのものが風呂敷包みになる。包みの大きさは同じだから、店を出る時怪しまれることはない。

店を出たら、決して走るな。カンのはたらく通行人もいるし、附近の商店にも人の目はあつて、ゆつくりと落ちついて歩いてゆき、角を曲がってから、スピードを上げる。そのためには、あらかじめ周辺の路画を調べておかねばならない。横町の多い場所ほど有利だ。

「盗品を売りにゆくのが、また、大変なんだぜ」

と、純一は得意気に説明した。

敗戦後はドロボーの季節だ。闇市の露天商なら、盗品と承知で買ってくれるが、そのかわり足もとを見られる。第一、本の知識のない相手にかかつては、なにかもひくくするめて二束三文だ。目利きがきいて、値うち通りに買ってくれるのは、筋の通った本屋である。むろん、売り込みにも学生服を着用する。

「おうちの使いできました」